

「訪中を終えて」

3-B 山梨県立大学 芦澤日菜

「中国に一週間行ってくる」と訪中前に家族や友達に言うと、素直に応援してくれた人は少なかった。日本人の対中認識が良くないのは知っていたが、身内にも中国を良く思わない人が大勢いるという事実が胸が痛くなった。私は、中国語の授業や中国大学生との交流活動を通して、たくさんの中国人と出会い、彼らの日本愛と人柄の温かさに触れた。だからこそ、中国に対して嫌悪感や固定概念を持つ人を目の当たりにして、本当に悔しくて、やるせない気持ちになった。このような経験から、私は日中友好大学生訪中団に参加するにあたり、二つの目的を設定した。一つ目は、自分の五感を駆使して中国の生活文化や歴史的建造物を体感し、中国に対する理解を深めることである。二つ目は、私が一週間で経験したことや、中国について感じたことを、多くの人々に発信することだ。これらの思いを胸に、私は一週間の日中友好大学生訪中団に臨んだ。本レポートでは、上海、成都、北京の三つの大都市を訪れて、私が感じた素直な意見を述べる。

まず、私が最も印象に残っている場所は故宮博物院である。私は、中国ドラマや映画を見るのが好きで、ラストエンペラーの映画も見たことがあり、現地での感動は想像を超えるものだった。一日では回りきるのが難しいくらい広大な敷地、高く立派な城壁、歴代皇帝が暮らしてきた宮殿、見るもの全てに圧倒された。はるか昔からこんなに洗練された技術があり、深い歴史があったのかと、中国文明の偉大さを痛感した瞬間だった。そして、中国から伝わったとされる日本の数々の文化を思い出し、その源をこの目で見る事ができた気がした。この他にも、三星堆や茶道体験、万里の長城など、中国が起源とされる文化や文明の発展に触れる機会は豊富にあり、中国文明の世界への影響力を実感した。

次に、移動中に見る中国の大都市を感じさせる街並みもまた衝撃だった。天井が見えないくらいに高いビルや、イルミネーションのようにライトアップされているビルが並ぶ夜景はどれも非日常的な空間で衝撃的だった。特に、訪中初日に見た上海のクルージングの上から見た景色は一生忘れられない絶景である。さらに、二十四時間動き続ける電気自動車や、現金もカードも必要としないキャッシュレス化など、日常生活の至るところに先進的な技術を感じた。長い歴史を感じる伝統的な建物から、現代のテクノロジーが詰まった煌びやかな建物まで、時代の移り変わり大きな発展を感じることができるのが、中国という国なのだと感じました。

最後に、今回出会えたガイドさんや大勢の中国大学生など、私たち訪中団を迎え入れてくださった様々な方々に関わる中で、本当に温かいおもてなしを感じると同時に、日本愛を再び感じる事になった。また、多くのお土産屋や売店で日本のアニメのデザインを目にするたびに、日本文化が親しまれていることに喜びを感じた。一方で、レストランのスタッフや空港の案内人など、サービス業に携わる人たちからは、日本の「お客様は神様」というサービスとは違う、やりすぎないサービスに親近感を感じた。食べているお皿の上に遠慮なくま

た次のお皿を重ねたり、何十分もずれた時間に登場開始の案内をしたり、慣れないサービスにクスッと笑ってしまう場面もいくつかあったが、私たちが拙い中国語で「谢谢」というと必ず笑顔で「不客气」と返してくれる度に、現地の人々の温かさを感じていた。

訪中団での経験を総括して、私が多くの人々に発信したいことは、「私は中国という国と人々が大好きだ」ということだ。中国に対して嫌悪感や不信感を持つ人々にも、自信を持ってそう言いたい。21歳という若いうちに、自分の足で中国に赴き、このような貴重な経験ができたことを誇りに思う。そして、この旅の中で繋がることができた中国の方々や3-Bのメンバーの皆はもちろん、全ての方々とのご縁を大切にしたいと強く思う。

最後に、日中友好大学生訪中団を運営してくださった日中友好協会、中日友好協会の皆様、現地の方々、3-Bの皆、全ての方々に感謝申し上げます。本当に、ありがとうございました。

「日中友好のために」

3-A 慶應義塾大学 精木瑛斗

私は、日本の大学生の代表として中国を訪問する機会を得ました。訪中前、私の中国に対するイメージは、外交上の緊張や政治的な問題に大きく影響されており、特に尖閣諸島を巡る領土問題や中国の強硬な外交姿勢が頭に浮かびました。しかし、現地での実体験を通じて、私の視点は大きく変わる事となりました。

中国を訪れ、現地の人々と直接交流したことで、私が抱いていた一元的な中国像がいかに限られたものであったかを痛感しました。現地の方々には非常に親切で、日本への関心が高く、私たちとの交流に前向きな姿勢を示してくれました。特に交流を行なった大学生の方は歴史や文化を共有しつつ、日中関係の未来を共に考える姿勢を持っており、この対話を通じて、私たち個人が国同士の対立を乗り越え、信頼関係を築くことができるという希望を抱きました。

一方で、日中間には未解決の課題も多く残されています。特に、尖閣諸島を巡る領土問題や、日本の領海に対する中国の侵犯行為は、両国間の緊張を引き起こし、時に外交的な対立を深めています。これらの問題に対しては、冷静な対話と国際法に基づいた解決が求められています。日本としては、この問題を軽視することなく、毅然とした対応を続ける一方で、感情的な対立を避け、建設的な解決策を模索する必要があります。

経済的な結びつきが非常に強い日中両国にとって、こうした問題の解決は地域全体の安定にとっても重要です。両国は経済的な相互依存が深まっており、日本と中国の関係は単なる隣国同士に留まらず、世界経済においても大きな役割を担っています。そのため、政治的な対立が存在する中でも、経済や文化的な協力関係をさらに強化し、共に発展していく道を模索することが重要です。

私が現地で感じたのは、政治的な緊張がある一方で、個々の中国人との交流は非常に温かく、友好的であるという事実です。特に大学生同士の対話は、未来に向けた希望を感じさせるものでした。彼らは日本の文化や技術に強い関心を持ち、互いに学び合い、協力し合うことに前向きでした。私は、このような積極的な若者同士の交流が、日中関係をより良い方向へと導く鍵になると感じています。日中両国の若者が対話を行い、相互理解を深めることで国際的な課題に対する意識も高まり、将来的にはより安定した関係が築くことができると確信しています。

今後、日本と中国がより良い関係を築くためには、「国」と「人」を分けて考えることが必要です。政治的な対立が存在する中でも、互いの文化や考え方を尊重し、対話を通じて信頼を築くことが重要です。教育や文化交流、ビジネスの分野における協力を通じて、私たちの世代が将来にわたって協力し合う基盤を作ることができると思います。

私自身、訪中経験を通じて得たこの学びを、今後の活動に活かしたいと考えています。もちろん、現実には解決すべき問題が多くありますが、対話と交流を通じて相互理解を深めるこ

とが、日中両国の友好関係の鍵になると信じています。日本と中国は隣国同士であり、経済的にも文化的にも深い繋がりがあります。これからも両国が共に成長し、平和で安定した関係を築いていくために、私は積極的に貢献していきたいと思います。最後になりましたが、このような今後の自分自身の人生に大きく影響を与えてくれるであろう貴重な経験をさせてくださった日中友好協会の方々並びに中国側の関係者の方々に感謝申し上げます。

「旅で得たもの」

3-B 横浜国立大学 伊藤佳音

今回、2024年度第二弾訪中国の一員として上海・成都・北京の3都市を一週間かけて訪れた。結論から述べると、この一週間の訪中は私にとって中国に対する印象を大きく変える転機になった。

正直に述べると、訪中前は中国に大してプラスのイメージばかり持っているわけではなかった。例えば、過去に日本がおかした過ちによって生じた確執が今も世代によっては根強く残っている。他にもインターネットなどを通して、お互いの国への負の印象が広まっている。私もその影響を受けていたうちの1人で、中国の経済や文化などに対して敬意は持ちつつも、完全に良い印象を持っているとは言えなかった。しかし、中国は日本が最も古くから繋がりを持つ隣国であり、経済的にも大きな影響を持つ国である。そのため、これからの国際社会において中国との関係は極めて重要になる。私は、大学で第二外国語としてその言語を学ぶと同時に、いつかは実際に訪れたいと考えていた。その矢先に第二外国語の先生にこの訪中国の活動を紹介していただき、参加するしかないとすぐに応募を決めた。

実際に中国を訪れて覆されたイメージは二つある。一つ目は、国民性に対する負のイメージである。確かに三星堆遺跡博物館を訪れたときは、ものすごい勢いで展示物の前に行き写真撮る中国人の積極性に圧倒されたこともあった。しかし、それは自分の子どもに見やすい位置で展示物を見せてあげたいなどの理由があるようだった。また、スーパーに立ち寄った際には、セルフレジの中国語表示が全くわからなくて戸惑っている私に対し、店員さんが2名ほど集まって身振り手振りで使い方を教えてくれたり、レジ袋に商品を入れるのを手伝ったりしてくれた。ありがとうございますと拙い中国語で使えらと、どういたしましてと笑顔で見送ってくれた。全体的に、中国の方は困っている人に対してとても親切であると感じた。この他にも、心が温かくなるような対応がいくつもあった。

二つ目は、自分たちと同世代の学生に対するイメージである。日本人に対してあまり良い印象を持っていないのではないかと心配していたが、交流した二つの大学で出会った学生はみんな残らず友好的だった。自己紹介で日本のアニメや音楽が大好きだと言ってくれる学生もいて誇らしく思った。何人かの学生とは今もチャットアプリを通じて交流している。その度に、国籍が違っても同じ世代の学生で仲間なのだと気付かされた。

結論として、中国に対して見知らぬうちに持っていた偏見は間違っていたと気付かされた。おそらくもっと広い年代の中国の方にお話を聞けば日本に対して否定的な意見が出たり、性格が違ったりもするだろう。それでも私が自分の目で見て、耳で聞いて触れた「中国」は、思っていたよりずっとあたたかいものだった。それに気づくことができたことが、この度で得た最大の成果であったと感じる。中国に対して偏見を持っている人たちこそ、実際に中国を訪れるべきだと考える。インターネットなどの切り取られた場面だけを見て国民性を判断したり、ニュースの報道だけで「中国は日本の敵だ」と捉えるのはあまりに

も短絡的である。日中関係を豊かにするのは、一人ひとりのそういったあたたかい経験や思い出なのではないかと考えた。また、今回の訪中では日本人同士での縁も広げることができた。各都道府県に散らばる同じような志を持ったこれだけの数の仲間に出会えたこと、そして異国の地で七日間を一緒に過ごせたことはこれからの私の人生の大きな財産になるだろう。今回の旅で出会った方々にもう一度会ったり、今回訪れた場所をもう一度訪れたりしたときに、もっと成長した自分を見せられるように勉学に励みたいと決意を新たにした。このような本当に貴重な機会を与えてくださった方々、そして旅で出会ってくれた方々に対して心から感謝したい。本当にありがとうございました。

「出会いと学びの機会、そして人々に感謝」

3-B 皇學館大学 郡悠真

率直に言うと、私は訪中団参加前、中国と言う国のことをそれほど良く思っていなかった。それを払拭し、世界の一端を見ることを目的に訪中団に参加した。結論、私の中国と言う国及び中国人への印象は大きく変わった。この七日間は私の価値観を大きく変える旅となった。

日本のメディアでは専ら領土問題や中国による領空侵犯が報道され、SNSでは残念ながら、中国人を嫌う思想の偏った投稿を目にする機会がある。ひと昔前にもパクリ騒動があった。偏向報道と分かっている、言論統制や思想の監視などの報道が原因となって、中国はずるく、思想の自由もなく、日本のことはよく思っておらず、圧迫された生活を送っているような印象を受けていた。だが実際に中国を訪れてみると、それがいかに一部の事を取り上げ、大きく報じていたかがわかる。今では、一部の悪いところをあたかも中国全体のこととして報じるメディアに腹が立つくらいである。私は中国を訪れて、多くの中国人と関わり、現地の人々の親切さややさしさに触れた。そしてその親切心ややさしさは、訪れた三都市のどこへ行っても同じだった。私は訪れた先々で現地の人々に「あなたは日本人か？」と話しかけられたし、自分から話しかけもした。中国語が堪能ではない私との会話を、いやな顔をせず、ゆっくりと話してくれた。訪中の事情を聞くと、笑顔で送り出してくれた。そんな人たちの笑顔を忘れずに生きていくことが、日中友好の第一歩なのではないだろうか。

この七日間は、私に多くの刺激を与え、向上心に火をつけた。今回交流した中国の学生たちは、日本語を専攻で学んでいる人がほとんどだったが、日本語を学ぶ前に英語を習得していた人が多かった。また、中国傳媒大学の発表を聞いていると、自分では考えつかないような発想があった。かたや私は特別に外国語を習得することなく、中国語さえも堪能でない中で訪中に臨み、学力は高くない。なんだか悔しくなった。同じレベルに達することはないとしても、常に努力を惜しまない向上心を持ち続けようと思うことができた。

今回の訪中で、中国人の学生数人と連絡先を交換することができた。パフォーマンスで尺八の演奏を披露したこともあり、楽器に興味を持ってくれた人もいた。帰国後一週間程度経過した今でもやり取りは続いている。お互いに相手の国の言語でやり取りしているため、時間はかかるが、学びながらやり取りできることに、お互いに価値を感じている。日本のアニメや漫画の話で盛り上がることもでき、「これが日中友好だ！」なんて思いながら会話を楽しんでいる。中国人に対して偏見を持っている日本人には、実際に中国人と話してみることが必要だと強く感じる。私は少なくとも、実際に話してみることで印象が変わった。隣国の住人として、互いに尊敬の心を持って付き合っていくことが肝要だと強く感じた。

私はこの旅で非常に多くの刺激を受けた。そして、もっと中国の事について知り、自分が日中友好の一助になりたいとも思った。私の日中交流の機会がこれきりだというのは、あまり

にももったいないことだ。だから、私は連絡先を交換した中国の学生たちとの交流を続け、日中友好協会のイベントにも参加したいと考えている。このような考えに至ることができたのは、今回の旅を計画してくださった協会の方々や、現地で受け入れてくれた方々、この機会に応募してはどうかと薦めてくださったゼミの教授など、たくさんの人のおかげだ。心から感謝を申し上げたく思う。間違いなく今回の旅は、私の人生において大きな出来事であり、分岐点になったと確信している。これを機に、中国への見識を深め、何度も訪れてみたい。

「1週間の日日交流と日中交流を終えて」

3-B 静岡大学 斎藤優花

私は、大学で経済学を専門的に学んでいます。中でもアジア経済について学ぶ授業で、中国の優れた人材と技術、急速に進むIT化などについて取り上げられていたことから、中国に対して漠然とはありますが、興味を持つようになりました。

しかし、大学で中国語を勉強してきたわけでも、中国について詳しく知っていたわけでもなかったため、訪中前は不安な気持ちが大きかったです。いざ中国を訪れてみると、現地の方々が快く私たちのことを迎え入れてくださって、とてもホッとしたのを覚えています。

訪中前、私は中国の人々は、自己主張が強く、外国人に対して閉鎖的なのではないかと考えていました。しかし、交流した西華大学や伝媒大学の学生の皆さん、お土産店や飲食店の店員さんなど、現地の方々の和やかな雰囲気やフレンドリーで分け隔てなく接する飾らない人間性を肌で感じ、自分が持っていた固定観念を良い意味で裏切られました。

このことから自分が外国に対して持っている偏見や固定観念は真実とは限らず、実際に現地へ赴いて様々な人々と交流をしたり、経験したりしなければ、その国の実態は分からないものなのだなどと改めて感じました。そのため、大学の授業で中国の経済や歴史、文化などを学ぶことももちろん重要ですが、このような訪中で実際に中国へ赴いて、現地の方と交流して、様々な体験をするというのはとても有意義で貴重な機会であると思いました。

また、中国の学生との交流だけではなく、ともに1週間中国で過ごした仲間も、日々の大学生活を送る中では到底出会えなかった人たちばかりで、日日交流を充実させることもできました。同じ班の中には、就活が控えている3年生の同期や既に就活が終わった4年生の先輩、中国文化や伝統芸能について大学で学んでいる2年生や1年生など、大学はもちろん、学年や専攻している学問も全く違い、一人一人が個性豊かで、そのような彼らと過ごす時間はとても楽しく、大学の友達と喋るのはまた違った面白さや新しい発見があり、とても新鮮でした。

特に西華大学の学生の皆さんに披露したパフォーマンスについては、合気道やアクロバット、尺八や縦笛、浴衣の着付けなど一人一人が特技を持っており、現地の学生に感謝の気持ちや日本の文化を届けたいという1つの目的に向かってみんなが協働した時間となり、これは、日中交流、日日交流をする上で、かけがえのない時間だったのだなと気づかされました。そのため、この班で一緒に1週間中国で過ごせてとても良かったなと思いました。

今回訪中団で出会った仲間は全国から集まっており、これから先、全員が集まることは難しいとは思いますが、この貴重な出会いを大切に、今後も大学生活を過ごしていけたら良いなと思っています。

今回この訪中団に参加してみて、中国に対する自分の固定観念やイメージが覆される体験ができたり、日本の文化とは違う所を発見できたりと、日本と中国のそれぞれの良さを感じることができました。しかし、訪中前の私のように中国に行ったことがないけれど、単に

ニュースやネットで得た情報などによって「中国の人は絶対こういう人だ!」とか「中国はきつこうだ!」と勝手に印象付けてしまっている人が多いと思います。そのため、今回の訪中団のような中国を訪問し、現地の人々と交流する機会を絶やすことなく、学生同士の貴重な日中交流を継続させていくことが、このような中国に対するネガティブな印象を払拭させる近道になるのではないかと感じました。

「私にとっての訪中」

3-B 青森中央学院大学 佐々木滉太

私は、9月2日から9日まで大学生訪中団として中国を訪れた。

中国という場所は、言葉では言い表せないほど素晴らしく、訪中した7日間は本当に充実し有意義なものであったと振り返る。毎日中国の文化や歴史に触れ学び得るものがあったのだが、大きく2点、私のこれまでの考え方を変えた学びについて述べたい。

1つ目は、中国に対する考え方の変化である。私はこれまで中国という国に対し、個人的な嫌悪感や蔑視するような思想はなかったものの、国同士には強い不信感や敵対視するような風潮が今も根強く残り、拭えない「なにか」があると思っていた。実際に、友人や家族に中国に渡ることを危険視され強く反対された。しかし、私は訪中することで、それは中国の歴史や文化についてなんの知見も持っていない日本人の、明確な証拠のない偏見であったと気付かされた。まず、中国はメディアで流されているような不衛生な都市ではない。1日目に訪れた上海は高級車がずらりと並び渋滞を作っていた。日本では考えられないほどの交通量に驚かされ、人口やその国のスケールと言ったものに面食らった。

たしかに、日本のメディアに映されているような汚染された空気や環境破壊問題はあるのかもしれない。しかし、それは本当に一部分を切り取ったものに過ぎないのである。経済大国としての壮大な一面をももっと報道すべきでは無いかと思った。

また、中国の大学を訪問した際に、交流した中国の学生は本当に親切でよく笑う印象だった。国民や学生による反日運動を盛んに行っているニュースを記憶していた私にとって、それは嬉しい誤算であった。行く先々の場所にいる中国の方々は私たち訪中団を大変歓迎してくださり、大いに国民に対するイメージの払拭ができたと思う。私は、そのあたたかな国民性に触れ、今日のSNSやメディアに報道されるような国民による反日運動を鵜呑みにし、現地の方々を知りもせずに批判するのは大きな間違いであることを改めて心に刻むことが出来た。

2つ目は、未知のことに挑戦する気持ちである。私はこの歳になるまで飛行機に乗ったことがなく、ましてや海外渡航歴もなかった。大学で訪中団を募集していると聞き、興味本位で応募した。それは私の悪い癖であった。その時の自分の「面白そうだ」という直感を信じ、後先構わずに取り進めてしまう。自分は大学で中国史や中国語を履修したわけでも無ければ、英語も満足に喋れないのである。本当に、応募理由はただの好奇心だけであった。そのため応募したあとにこの挑戦への不安が募り、応募したことを後悔した。

また、実際のところ自分が推薦されるとは少しも思っておらず選抜の知らせをいただいた時、中国へ渡る高揚感よりも未知の場所に、顔も知らぬ人たちと訪れる不安感や恐怖心の方が大きかった。私は先述したが、他の団員とは違い、中国に対しての強い関心や豊富な

知識があった訳ではない。渡航するその日まで、陰鬱な気持ちでいっぱいであった。

しかし実際に中国に飛び立ち、自分が生まれ育った国から足を踏み出す体験は私を大きく成長させたと確信している。未知の場所というものは私の本来の弱さを顕にさせ、1人では何もできないということに気づかせてくれた。当初、大学のレベルから引け目を感じ距離を感じていた訪中団のメンバーにも自ら歩みよることの必要性や、母国語以外の言語を理解したいという気持ちなど本当に新たな気づきが多い日々であった。私はこれまでの人生を「井の中の蛙」であったと振り返る。中国という国のスケールの大きさや、他大学の学生の温度感など、これまでの自分のルーツとは異なる者たちと言葉を交わし、体感して初めて自分の存在の小ささを認識できた。

私は、本当に3-Bのメンバーと活動を共にできたことを誇りに思う。彼らとこの1週間にも及ぶ日々を共有出来たことは私の人生にとってかけがえのないものとなった。

最後に、隣国に住み、訪中した私に課せられるものとはなにか。それは中国と日本の文化交流の促進であると考え。

私は大学では経営・法学部に在籍しており、ゼミなどで地域と連携をはかり様々なプロジェクトを企画してきた。これまでは地元「青森」の文化や地域の特性を活かすプロジェクトを考えてきたが、いつもありきたりなものになっていたと思う。どこかオリジナル性に欠け、私にしかできないことはなにか、について考えることを避けてきたように思う。しかし訪中した私は、他の学生にはないリアルな中国を見て体験したという強みがある。それを生かさない手はないだろう。

また、この体験を通し、学びえたものや中国に対する興味関心を、他者にも同じよう感じて貰いたい。そのためにはまず私が積極的に、今後中国の文化を学び続け深く知ることが必須条件である。強い偏見や差別意識、古い確執などこの時代に必要のない悪習を払拭し、今のリアルな中国を発信していきたい。

今回青森から参加し、右も左も分からずに戸惑う私を支え活動を共にして下さった訪中団の方々、随員スタッフの皆様、ご尽力いただいた全ての皆様、大変お世話になりました。皆様のサポートのおかげで大変貴重な経験を得ることが出来ました。本当にありがとうございました。

「訪中での気付き」

3-B 東京農工大学 寒川柚月

私は今回、訪中団での中国滞在を経て、短期間で中国の都市や文化、歴史、そして現代の発展を体感する機会に恵まれました。中国が技術革新やインフラの急速な発展を遂げていることは知っていましたが、具体的な日常生活や文化について知る機会があまりありませんでした。この7日間で、都市の発展や歴史的な文化遺産、そして中国の人々との交流を通じて、様々な視点から中国という国を改めて知ることができました。

まず、訪問先の都市の発展ぶりに非常に驚かされました。上海や成都、北京といった主要都市は、想像以上にモダンで活気に満ちており、経済成長のスピードがいかにも早いかを実感しました。北京の華やかな街並みはもちろん、上海のセンタービルの見学では、急速な経済成長を象徴する都市の一面を実感しました。夜の黄浦江クルーズでは、ライトアップされた上海の高層ビルが連なり、中国の発展を想起させるものでした。食文化にも興味を持っていたので、現地での多様な食文化の体験は非常に興味深いものでした。

次に、西華大学や伝媒大学への訪問では、学生と実際に対話することができました。教育制度や研究活動に関しても、互いに私たちが学ぶことは多く、国際的な視点での学問の重要性を再認識しました。また、キャンパスの作りも特徴的でした。広大なキャンパス内には学部ごとの校舎以外にも寮、飲食店、などが含まれていました。中国では、大学は一つの街であるというようなことを聞いたことがありますが、今回それを実感したようでした。日本の学生からすると、大学と日常生活は全く同一の環境とは言えない感覚ですが、中国での、生活が大学内に含まれている感覚に新鮮さを覚えました。

各都市では、博物館や美術館を訪れ、長い歴史を持つ中国文化の豊かさとその多様性を実感できました。また、それぞれが何世紀にもわたってきれいな状態で保存されていることに対し、教科書では得られないリアリティを持ち、多層的な歴史の深さを感じさせました。文化財保護の取り組みも世界が一丸となり協力していく必要があることを認識しました。

この経験は私にとって、グローバルな視野を持つことの重要性を再確認させてくれました。全体を通して、ホテルや空港内の売店であっても英語が通じない場面も多かったです。主要と言われている都市では英語が通じることが多くはなっているのですが、忘れがちですが、その国の文化を深く知るには、現地で話されている言語の習得がやはり重要であると改めて学びました。これからの時代、世界中で経済的な競争だけでなく、文化や技術、環境問題など、さまざまな分野での国際的な協力が重要になるでしょう。国家間では、冷静かつ理性的な対話を通じて、より健全で建設的な関係を築くことが大切だと感じました。個人間では、一人ひとりが積極的に国際交流に関わり、異文化理解を深めることで、未来に貢献できる道を見つけれられるのではないかと考えています。

「私の中国と本当の中国」

3-B フェリス女学院大学 谷口 悠

元々私が思う中国は、経済発展が著しく伸び、国家第一という堅苦しいイメージがありました。また、マスメディアの情報でしか中国を知らなかったため、あまりいいイメージがなかったというのは事実です。しかし、父の会社の取引先が 8 割中国なのもあって一般的な家庭より中国に対して親近感は持っていたとは思いますが。

しかし、なぜそんな私が今回の訪中団に応募したのは主に 2 つの理由があります。1 つは、幼少期の頃読んだ国の図鑑で中国の歴史や文化を知って「こんなにすごくてきれいな国があるんだ」と幼いながらに衝撃を受けたのを今でも覚えています。いつか、この目で見てみたいと強く思うようになりました。

2 つ目の理由として、現代の日本人は中国に対して偏見や固定概念に囚われ過ぎていると感じるからです。勿論、私も囚われていた部分もあるので一概には言えませんが、実際多いように感じる出来事がありました。この現状を変えるためにできること、それは私が実際に中国へ行き、現地の方と交流し中国を知り、この目で見て、それを伝えて少しでも中国の良さを多くの人に知ってもらう事が今の私にとってできる最善策だと考えました。

以上が訪中団に応募した主な理由です。

実際に、訪中に行ってみて思ったことがあります。それは、「感動」「怒り」「伝承」の 3 つです。

「感動」は中国の歴史や文化について触れ中国 4000 年の歴史に今自分が存在してそれを目の当たりにしていること、特に万里の長城は自分自身とても感動しました。技術も発展していない時代の中で人間が作ったとは思えない程のスケールの大きさに驚きました。それとは別に、中国人の方の人柄にも「感動」させられた訪中でした。私が話す拙い中国語を一生懸命に聞いてくれ中国や自分自身のことについて沢山お話ししてくださいました。また、いくら他人であっても自分のことのように気遣って下さる姿にとても感動させられました。次に「怒り」です。なぜこんなにも、日本では偏見を持って中国のことを何も知らないのに中国を悪く言えるのか。中国の方と交流するたびにとても胸が痛みました。政治、マスメディアによる情報操作、フェイクニュース、親世代からの中国の偏見が今の若者世代にも受け継がれているのであると考えました。中国の人は、みな口をそろえて日本はとてもきれいで美しく優しい国と仰っていました。私は、このような日本の現状を見て見ぬふりはもうできません。現在の日本の中国への固定概念を必ず壊して、新たな日中友好関係を築くことが出来るように努めて参ります。

最後に「伝承」です。私が今回の訪中で得たものを、世間に発信していくことが一番重要であると感じました。中国の歴史、文化、食べ物、国民性、言語、様々な分野で私は今回の訪中を通して学びました。それらの学びを自分の中でも活かすことはもちろんのこと、他者への学びに活かしていきたいと思いました。自分がきっかけで少しでも中国に興味を持って

親近感を持ってくれることに私は、意味があると思います。

今回の訪中では沢山の方と出会い自分にとって人生の転機だと思えるほどの経験ができました。日中友好協会の皆さま改めて感謝申し上げます。

「訪中を終えて」

3-B 愛知大学 前田帆風

中国は“メンツ”の国というイメージがあったが、実際に上海などの大都市を訪れてそれを強く感じた。高くそびえ立つビルや、アイラブ上海という文字の多さから愛国心やメンツを気にする様子が伝わった。西華大学との交流の際は、ゲームや会食を通じて現地の学生と仲良くなれたことが嬉しかった。その学生は英語が苦手だそうで、日本語を学び始めたらしい。中国に行く際は英語よりも中国語やその地方の言葉を学習していった方が現地の人との会話に苦労しないだろうと感じた。私は中国の都市と内陸の格差について気になっていたため、四川を訪れ現地の学生に保険や医療制度について聞いてみたが、そこまでの差は感じないと言っていた。今回訪れた場所は内陸でも都会の方であったため、あまり差を感じないのかもしれない。中国の農村やもう少し奥の内陸にも行ってみたいと思った。

今回の訪中で一番印象に残ったのは万里の長城だ。大学生のうちに来られると思っていなかったのととても貴重な経験となった。中間地点まで汗水たらして登った後のアイスは最高だった。あれだけの急勾配と高さでは敵も退陣せざるを得なかったのではないかと思った。日中戦争の戦場でもあったため、鉄砲を構える穴もあった。日本は島国であるため、陸路からの侵入者を防ぐような城壁を作る必要が無かったのかもしれないが、他国と大陸でつながっている中国は自国を守るために必死だったのかと感じた。道中ではイランの教育関係の政府の方と交流できてとても有意義な時間を過ごせた。

数多くの豪華な食事の中でも四川料理が特に美味しかった。独特の香辛料とパンチのある辛さが印象的で、もう一度食べたいくらいだ。上海の料理は四川や北京に比べて甘いように感じた。上海で働く日本の駐在員はこの味に慣れるのに時間がかかるのではないかと感じた。北京料理も上海に比べてあっさりしていて美味しかった。今回の訪中では地元のレストランなどには行けなかったため、また中国に行きローカルな食事をとってみたいと感じた。食事の他、上海博物館や三星堆博物館に行き、中国古代の土器や土偶を見ることができとても面白かった。紫禁城はガイドさんの丁寧な説明で、魔よけの動物や屋根の色、皇室の役割について知ることができとても楽しかった。中国ドラマに出てくるそのままとても感動した。一週間の訪中で沢山の貴重な博物館や美術館に行けたことに驚きと感謝の気持ちでいっぱいである。

私の属する現代中国学部でも学んだ通り、中国は“メンツ”の国であり、自国の見せ方やコミュニケーションの取り方が日本とは異なる所がある。隣国であり、日本と似たような所があるように見えて全く違う中国の文化を知り、体感する一つの良い機会となった。もし就職後に中国や海外との取引などをする機会があれば、今回の訪中で自分の目で見て感じた経験を糧にして相手国の文化を素早く受け入れられるようになればいいと思った。

今回の訪中を通して本当に貴重な経験をすることができた。あつという間の一週間で毎日が刺激だらけであった。訪中を企画・運営をしてくださった方々に感謝すると同時にもっと中国について学びたいと感じた。

「歴史と現代が交差する中国」

3-B 大阪大学 松井花珠

中国の三大都市、上海、成都、北京を巡る今回の訪中は、現代の活気と古代の歴史、そして自然の美しさを感じられる感動的な体験でした。それぞれの都市には独自の魅力があり、訪れるたびに新たな発見がありました。

まず最初に訪れたのは上海です。この都市は、中国の近代的な都市の象徴であり、急速な発展を遂げたその姿に圧倒されました。特に印象的だったのは、世界第2位の高さを誇る上海タワーです。632メートルもの高さから眺める上海の街並みは、黄浦江を挟んで広がるビル群と歴史的な建物が混在し、都市の多様性を感じさせます。また、夜には外灘でのクルージングを楽しみました。ライトアップされたビル群と、欧風建築の対比が非常に美しく、黄浦江を中心に繰り広げられる上海の夜景に魅了されました。さらに、上海博物館では、中国の長い歴史と文化を知ることができました。特に、中国の古代陶器や青銅器、書画の展示品が印象的で、これらの工芸品が持つ歴史的価値や美しさに触れることができました。上海は現代的な都市でありながら、歴史的でもあり、その調和が私に強い印象を与えました。

次に訪れた成都是、上海とは全く異なる雰囲気を持つ街で、自然と文化が豊かに調和した場所です。成都で最も楽しみにしていたのは、成都パンダ繁育研究基地の訪問です。ここでは、自然に近い環境で保護されているパンダたちの姿を観察することができました。パンダは中国を代表する動物であり、その保護活動に中国がいかに力を入れているかを知ることができたのは、非常に貴重な体験でした。また、成都近郊に位置する三星堆遺跡の博物館も訪問しました。ここでは、紀元前の古代文明が栄えていたことがわかる数々の遺物が展示されており、特に独特な仮面や像の造形物には心を奪われました。この遺跡は、長い歴史の中で独自に発展した文明の痕跡を感じさせ、中国の文化的多様性を象徴しています。成都是歴史だけでなく、四川料理もその名を広めています。特に火鍋は、辛味と独特な香辛料の風味が特徴で、四川料理ならではの豊かな味わいを堪能しました。西華大学との交流では様々な文化を学び実際に体験しながら現地の大学生と交流することができ、素晴らしい出会いがありました。

旅の最後に訪れたのは北京です。中国の首都であり、歴史と権力の象徴であるこの都市は、その大きさに圧倒されました。北京では明・清朝時代の皇帝の居住地であった故宮（紫禁城）を訪問することが出来ました。広大な敷地内に並ぶ壮麗な宮殿群は、まさに中国の歴史の頂点を象徴しており、その建築美と歴史的価値に圧倒されました。また、万里の長城も訪れました。延々と続く防御壁は、かつての中国を守るために築かれたもので、その規模と歴史的背景に深い感銘を受けました。自然の中にそびえる長城の壮大な風景は、何世紀にもわたる

中国の長い長い歴史を肌で感じさせてくれました。

この訪中を通じて、上海では未来と過去の融合、成都では自然と文化の共存、北京では歴史の重みを体験しました。それぞれの都市が持つ独自の魅力に触れることができた今回の訪中は、私にとって非常に意義深いものでした。中国の広大さと多様性を改めて実感し、今後にもさらにこの国への理解を深めていきたいと感じました。

「中国に赴いて感じたこと」

3-B 中央大学 松谷明日海

今回の訪中事業を経て多くのことを学びました。また、今後の私生活でこの事業で得たことを活かしていきたいと考えています。以下では、1週間の経験を書くとともに、訪中前と後の私自身の感情の変化や今後どのようにこの事業の経験を活かしていくのかを述べていきます。

私は中国に訪問する前までは中国に対して多くの偏見を持っていました。現在、政治的側面において中国政府と日本政府は対立することが多く、私は日頃のニュースを聞いて日本は中国と対立する傾向があるため、中国人に対してネガティブなイメージを持っていました。特に、中国人の性格やマナーに対して誤解している部分がありました。また、草の根レベルの交流でも日本人と中国人は文化や生活様式の違いから友好的な関係を構築することは難しいと考えていました。

しかし、実際に中国に訪問してみて、いくつかの点において中国のイメージが変化することがありました。まずは、中国において技術分野が発展していることです。移動中に目にした夜景では、多くのLEDライトを用いて装飾された高層ビルが上海や北京の街を彩っていました。訪中前までは、中国は日本よりも40年ほど発展が遅れているという固定概念から中国の技術は日本より発展していないと思い込んでいました。しかし、博物館やバスガイドさんのお話を通して、中国のEV自動車の普及政策や最先端科学技術に驚かされることがありました。さらに、中国人に対するイメージが変化しました。私は前述したように中国人に対して非常に懐疑的な目を持っていました。特に、マナーに関しては日本の文化との違いから非常にネガティブな印象を持っていました。実際に、訪中の最中にも中国人の行動に驚くことがあり、カルチャーショックを感じることもありました。しかし、お店の店員さんやホテルのスタッフさんはとても親切に対応していただくことができました。私自身が中国人の一部の行動だけで偏見を持っていることを感じました。この経験から、日本に来ている中国を含む訪日外国人のマナー問題のことを改めて考え直す機会となりました。中国にはない日本の暗黙のマナーは言葉や注意書きに出して目に見える形で伝えないといけないということを感じ、お互いの文化を尊重しあう異文化理解の重要性を改めて感じました。

以上の経験から、日本にいる生活においてもこの事業で得た経験を活かしていきたいと考えています。具体的には二つのことに取り組みたいと考えています。一つ目は、中国語の勉強です。私は、今まで中国語を勉強する機会がありませんでした。訪中にあたりいくつかの簡単な言い回しや単語を覚えていきましたが、現地の学生との交流の際に思うように中国語を話すことができず、意思疎通の点で困難なことがありました。この経験から、中国語を学んで中国人の方々とコミュニケーションができるようにしたいと思います。二つ目は、今回の訪中事業を経て実際に見たこと・感じたことを多くの友人や家族に伝えていきたいと思っています。日本で得る中国の情報が偏っている傾向があります。そのため、事実とは異なる

る情報が多く、日中両国の関係悪化につながる可能性があります。次世代に日中の友好的な関係を維持していくためには偏見のない情報を伝えていく必要があります、私自身の行動が両国の友好的な関係の構築のために微力ながら貢献できるように努力していきたいです。

最後に、今回の訪中団に関わってくださった多くの関係者の皆様のおかげで中国の深く長い歴史を肌身で感じることができました。個人の旅行ではいけない場所に行くことができとても学びが多い機会となりました。もう一度中国に行く機会があるならば、個人の旅行者として今回の訪中で見落としていた中国を見つけに行きたいと思っています。ありがとうございました。

「訪中を終えて」

3-B 信州大学 森本ひなの

私の訪中前の中国に対するイメージは、大気汚染や監視社会、マナーの悪さなど、どちらかというとネガティブなものでした。また、正直なところ、メディアの影響から、中国では日本に対して好意的な人は少ないというイメージを持ってしまい、日本人は邪険にされるのではないかという不安も少しありました。しかし、自分や周囲にそういった偏見があった国だからこそ、メディアのフィルターを通してではなく、自分の目で直接中国という国を見てみたいと思ったのが、今回の訪中国に応募した理由の一つでもあります。そしてこの七日間で、一部分ではあるものの、実際の中国を肌で感じる事ができ、多くの驚きや発見がありました。特に私の中で変化があったのは中国人に対するイメージです。今回の訪中では、現地の大学生をはじめ様々な人との出会いがありました。訪中前は、中国人のステレオタイプと無知から、中国人に対してなんとなく「怖い」というイメージがありましたが、ガイドさんや現地の店員さんにも温かく接していただき、そのイメージは覆されました。西華大学の学生とは、簡単なゲームや伝統文化体験を通じて交流していくなかで、同じように笑いあい、「中国人」として一括りにしてしまいがちな相手も、自分と同じように一人の人間であることを改めて実感しました。また、飛行機で出会った中国人学生は、メッセージのやり取りの際に、中国語と日本語両方の言語でメッセージを送るといった気遣いをしてくれ、その優しさに感謝しました。そしてなにより、国や言語の違いを越えて友人になれたことに大きな喜びを感じました。

また、中国の独創的な町並みも印象に残っています。クルーズ船見学で眺めた上海の夜景は、ビルやタワーが想像以上に先進的で派手で、とても綺麗でした。その一方、意外にも緑が多く、大量のスクーターやゴミ拾いの乗り物、バス専用の道路など、日本では見かけないような光景もみられ、活気に満ちた自由な空気を感じました。さらに中国で過ごしている間、日本のトイレの清潔さやサービス精神を改めて実感しました。中国のトイレでは、基本的にトイレットペーパーは流すことができず、そもそも個室ごとにトイレットペーパーがついていないトイレもありました。日本では当たり前だったトイレの設備や管理、日本の衛生観念にありがたみを感じる瞬間でした。

この七日間の訪中は、飛行機にすら乗ったことがなかった私にとって、本当に新鮮で貴重な充実した経験となりました。三つの都市を巡ったことで、同じ中国であっても気候や人、料理が全く違う中国の広大さを実感し、自分の身をもって体験することの重要性を学びました。同時に、自身の中国語学習や中国に対する理解の深さを見直す良い機会にもなりました。店員さんなど現地の人々に話しかける際は、拙いながらも中国語を使うことを心掛けていたのですが、ネイティブの中国語を聞き取るのはとても難しく、相手の話していることが理解できない場面も多々ありました。また、私は中国の歴史や日中関係に関して無知な部分が多く、さほど勉強してこなかったのが今回の反省点です。

最後に、訪中団を企画、運営して下さった友好協会はじめ、サポートして下さったすべての方々に感謝申し上げます。

「初めての中国本土で感じたこと」

3-B 東北大学 柳川昂貴

今回の訪中団で初めて中国本土を訪れる機会を得ました。香港人の友人がいることから、香港の文化にはよく触れていた時期があったため、中国文化に関してある程度の理解があると考えていました。しかし、中国本土を訪れてみると、その文化や人々の生活が私のおイメージとはまるで異なることに驚き、私の中での中国のイメージは大きく変わりました。このレポートでは、私が特に印象に残った「新しさと古さの混在」という視点から中国本土の街や人々を見て感じたことを書き、最後に訪中団の班員と時間を過ごして感じたことを書きたいと思います。

最初に訪れた都市は上海でした。上海の中心街は、まさに経済と金融の中心地という印象を強く受けました。上海タワーから上海の中心部を見渡すと、国際的な銀行のヘッドクォーターが立ち並び、プール付きの高層マンションや豪邸が広がる、いかにも成功者が住む街並みが広がっていました。これらの近代的なビル群と対照的に、街の郊外にバスで出ると、一転して古く雑然とした住宅街がぎっしりと詰まった様子で広がっており、時代を超えて存在しているかのような独特の風景が印象的でした。この2つの新しい街並みと古い町並みが横並びになっており、また古い方の街並みでは活発に人々が行き交う様子であるように見えたのに対して新しい街並みの方では人通りが全くと言っても良い程少ない様子はどこか街を見ていて不思議な感覚にさせられました。

次に訪れた北京では、さらにその「新しさと古さの融合」を強く感じました。北京も国の中心都市として近代化された街ですが、故宮や天安門といった歴史的な遺産が都市の一部に存在し、何世紀もの長い歴史を現代の街並みの中に感じ取ることができました。

現地の学生とも交流し、SNSの使用が制限されていることや、国際的な情報の流通が限られていることを実際の中国人から聞くと、より一層中国の一部がまだ外界に対して閉ざされているという感覚も得ました。しかし、同時に、街を歩く人々の表情や生活のリズムにはどこか自由きままでマイペースな雰囲気も感じられ、この外向きの不自由さと内向きの自由さのギャップのようなものがとても興味深かったです。

全体的に中国の都市では、近代的な発展が進む一方で、古い文化や伝統が日常の一部として根強く残っていることが強く印象に残りました。また、香港のような速くてせかせかしたペースの雰囲気も、若者の外向きの自由のようなものも、同じ中華圏なのにあまり感じず、何か違う生活圏なんだという実感を得ました。これはとても面白い気づきでした。

訪中団の班員とは一週間ほど一緒に時間を過ごしましたが、流石に全国各地から大学生が沢山集まると面白い人が沢山いて楽しいなと思いました。自分は過去に中国語を学んだ経験が無かったので中国語を専門にしている人を見ると単純に憧れを感じることもありました。特に中国は驚くほど英語が通じなかったのでそういう時に中国語を勉強している人は

ちゃんと現地の方と意思疎通ができてうらやましかったです。そのうちまた中国には行ってみたいと思えたので中国語を少しは分かるようになりたいなとおもったりしました。

「出会いから友好へ ～中国の食文化と環境問題への取り組み～」

3-B 長野県立大学 吉越梨里子

私が訪中団に参加を希望したのは、高校生の時、中国からの留学生と同じクラスで生活した際に話を聞いて、彼女の生まれ育った中国とその文化についてより詳しく知りたいと考えたからです。特に、フランス料理、トルコ料理と並んで世界三大料理として世界に周知されている中国の食と急速な経済成長に伴う環境汚染について関心があり、これらに対し理解を深められたらと思っていました。生まれた初めて訪れる広大な中国は、見るもの、聞くもの、食べるものすべてが私にとって新鮮で、訪れた場所、出会った人すべてに刺激を受けました。感想文を書くにあたり、非常に充実したこの1週間を振り返り、関心のあった2つの観点から印象的だった点を述べたいと思います。

1点目は、古代から続く豊かな食文化です。中国各地を訪問する中で、その土地ならではの多様性のある食文化に驚かされました。上海の魚介類が豊富で甘味が特徴的な食事から、四川の香辛料を用いた辛味のある料理、そして北京の日本人になじみのある味付けなど、それぞれの地域で育まれた食文化は、人々の生活様式や風土、歴史を物語っているように感じました。特に印象に残ったのは、中国の食文化が持つ歴史の深さです。例えば、北京ダックは元朝の宮廷料理として誕生し現在もなお食され続けていること、大皿から取り分けるのは、料理の共有を通じて人とのつながり・団欒を大切にするという中国で培われた思想を象徴していると学びました。また、同仁堂知麻健康ゼロ号店の見学では食によって健康を保ち、体の不調を治していくという「医食同源」という考え方が伝わっていると知り、長い歴史を持つ中国の食は、食材や調理法、そして食卓でのマナーに至るまで、独自の文化を形成していると感じました。

2点目は、中国の環境問題への取り組みです。私は中国の環境に対して、急速な経済成長の裏側でPM2.5などの大気汚染や水質汚染といった深刻な問題が顕在化し悪化の一途をたどっているのではないかとマイナスな印象を持っていました。しかし、実際に3都市を訪問すると中国政府は環境問題の解決に向けて取り組んでおり、再生可能エネルギーの導入等の対策がとられ、予想を大きく覆す状況でした。電気自動車の普及や手軽な料金の公共交通機関が拡充、自転車シェアリングサービスの導入など私の暮らす街以上に進んだ取り組みがなされていました。特に感銘を受けた点は、車のナンバープレートの区別です。新エネルギー車普及のための政策として色が異なっており、ガソリン車はナンバープレートの発行に費用が発生する、平日に通ることのできない道路があるなど厳しくルールが定められていました。また、ポイ捨てされるごみは、環境に大きな負荷を与えますが、中国では日本よりも街でごみ箱を見かける機会が多かったように思います。ごみ箱はリサイクルできるか否かによって分別されており、このことはガソリン自動車の規制の事例とともに私の

中で中国の環境問題に対する認識が大きく変化した要因となっています。

今回の訪中では、様々な歴史名所、圧巻の景色、料理、人との交流など多くの非常に貴重な経験を得ることができました。期間中、自身の五感を最大限に活用して中国を感じることで中国に対して理解を深めることができたと感じます。しかし、帰国後、現地で交流した2校の大学生とのメールのやり取りを通じて、私はまだ中国のほんの一部しか知ることができていないのだと気づかされました。そのため、今回のご縁をきっかけに、日中での交流を続け、中国についてより一層深く知っていきたいです。個人同士の平和がなければ社会や国家間の平和を作れないという言葉にもあったように、出会いと交流によって互いを知ることがは友好関係をより良いものにするために重要だと考えます。私がこのように考え、多くの経験ができたのは、平和や関係性の回復に尽力してくださった先人の方々の努力の結果だということを忘れず、今後は私自身が少しでも両国の友好関係のために貢献していきたいと思います。

最後になりますが、今回の7日間の訪中を計画し、支えてくださった日本中国友好協会や中国日本友好協会の方々、お世話になった現地の方や一緒に行った仲間など、かけがえのない経験をさせてくださったすべての方々に厚く御礼申し上げます。

「訪中を通して学んだこと」

3-B 天理大学 吉田頼親

私は大学で中国語を専門に学んでいる。なぜ中国語を専攻しているか。いくつかの理由を挙げるができるが、大部分を中華圏の文化、食文化に関心があるからだと言える。そんな私にとって今回の日中友好協会、中日友好協会による訪中団への参加が決まった瞬間はこの上ない嬉しい気持ちでいっぱいになった。正直なところ、大学生であるということもあり学業と両立させながら海外へ渡る旅費を貯めることは決して容易ではない。さらには、私の勝手なイメージだが、中国という国はほかの国に比べて入国するにあたってビザを作成する必要があり、一筋縄ではいかない。言語に関してもまだまだ未熟な中国語では日常の買い物や移動ですらままならないであろう。それゆえに、今回の訪中団では随行員や現地のガイドの方のサポートを頂きながら中国という国を学ぶことができるということで、日中友好協会と中日友好協会の皆様には、このような素晴らしい機会を与えていただき感謝してもしきれない。

訪中のスケジュールとしては、上海、四川、北京の3都市の名所見学や文化体験、現地の大学に伺い、大学生どうしでの交流が主なものであった。この7日間のスケジュールはとても充実しており、存分に中国という大国の文化や食文化を見て、味わって、体験して知ることができた。その中でも特に印象深く残っているのが2つある。1つは現地の大学生との交流である。この大学生訪中団の趣旨にもある通り、日本と中国の関係を今現在の関係よりもより良いものにしたいのであれば、まずは若い世代の私たちが良好な関係を作ることが最重要であると思う。従って、今回訪問した西華大学、中国伝媒大学での交流は大学生訪中団ならではのことであって、個人で中国に渡航して叶うようなことではないと思うため、大変貴重な経験であった。交流の場で行った、パフォーマンスは約1か月前に決めて、全体で合わせる機会も少なかったにもかかわらず大成功を収めた。中国人学生の方たちにも大きな拍手とともに歓声を頂き、これまでの努力が報われた気がした。「日中友好を実現するためには、日日友好から」この言葉通り、まずは、日本人学生どうしが助け合い、支え合う。そのあとに国境を越えた友好関係が実現するのだと考える。私の班は早々に日日友好を実現させていたのだと思う。そうでなければ、パフォーマンスの成功はなかった。2つ目は万里の長城見学である。私は中国史の中でも中華七雄が争った、春秋戦国時代に関心を持っている。ゆえに、秦の始皇帝が中華を1つに統一したのちに作ったとされる万里の長城は、人生で1度は足を踏み入れてみたい場所の1つであった。その万里の長城にこんなにも早く訪れることができ、他の何ものにも代えがたい喜びだ。実際に自分の足で登って、改めて万里の長城の大きさ、偉大さを知れた気がする。教科書で学んだそのまま、いや、それ以上の大きさだった。

今回の訪中を経て、改めて中国という国の雄大さを学ぶことができた。必ず、この訪中団で得た知識をこれからの大学生活、人生に活かしていきたいと思う。また、中国に訪れた経

験がない人に、中国とはどのような国であるのかを得た知識に加え、自分で調べ、学び共有したいと思う。また、中国に訪れたい。日本中国友好協会、中国日本友好協会の皆様、素晴らしい機会を与えていただき誠にありがとうございました。